

こんな本
あんな本

「くまのパディントン」ほか

マイケル・ボンド作

ペギー・フォートナム画

松岡享子訳（福音館）

菊池百合

「パディントン」それはロンドンの駅の名です。しかしこのパディントンは暗黒の地ベルーから密航して来た小ぐまです。パディントン駅で奇妙な札を首からぶらさげてうろろろしていた時、偶然ブラウンさん夫妻に出会いました。そしてブラウン家の一員として暮らすことになりました。

パディントンのいるところ必ず珍事件ありというくらい、次々に愉快なことが起こります。パディントンが慎重に計画して真剣に行動すればするほど、おかしなことになってしまうのです。一度パディントンに出会った人は、どこまでもパディントンを追いかけたくなるようなたのしい話です。

この本は幼児に読んであげるといふ点では不適當です。それでもあえてここに紹介したのは、保育する人が幼児を理

解するヒントを含んでいると思うからです。

◎パディントンの行動は、幼児の行動と共通する点が多くあります。

ママレードの大好きなパディントンは、ひげや手についたママレードをふこうとしますが、かえってあちこちにベトベトついてしまい苦労します。本人はいつしようけんめいしているのが、他人からみるとどうも奇妙にうつることがあるものです。

◎ブラウン家の人々は、パディントンといっしょに生活するうちに、扱い方をのみこみます。

なんともいえぬ妙な表情を浮かべている時は、何を聞いてもむだなのです。そんな時、パディントンはブラウン家の人を喜ばし驚かさうと創造力をせっせと

働かせているところなのです。その結果は必ずしも計画通りとはいえません。しかしそれでよいのです。ある日旅行日程——パディントン風には料行日底——を作りつつ地図の上にママレードのオレンジの皮をこびりつけてしまいました。いざ目的地をめざした一行は、変な所で曲がってしまいました。失敗のうめあわせに心をつかうパディントンといささか不満なブラウン家の子どもたち、なだめるブラウン夫妻。しかし思いもよらぬところで予想もしない楽しい経験をしたりします。

子どもの遊びの中には、偶然に生じた活動が非常に子どもの興味をひく場合があります。

◎ブラウン家で暮らすうちに、パディントンの行動範囲が広くなり知人も多くなります。特に骨董屋のグルーバーさんと

は毎日「お十一時」にココアを飲み、菓子パンを食べながらおしゃべりを楽しみます。また、お店のことでよくグルーバーさんに前足をかしてあげたりします。パディントンはある日グルーバーさんにつれられて、せりに行きました。だれもかれも親しげですので、帽子をふったり前足をふったり挨拶をしていたつもりだったのが、実は高価な大工道具を買うためになっていました。また、ママレード入れに、銀器をただ同然で手に入れたりもしました。

パディントンは、このようなできごとを連発させては読者を楽しませてくれます。これらのできごとは単にパディントンという小ぐまの経験であると決めつけてしまう前に、保育室にいる幼児たちの日常生活での経験でもあると思いたいのです。

おとなどは違った考え方、感じ方で生活している子どもたちの姿でもありまよう。また、少しでもおとなに近いことをしたいと背のびし努力している様子でもありましよう。それらを多角的にとらえて、いわば解説つきの描写をしている作者の心に共感し、学ぶべき点が多いと思います。

なによりも愉快な本です。楽しみ笑いながら読むことが、保育者の心の安らぎにもなるでしょう。一冊読み終わると、また、パディントンにあいたくくなります。

全八冊のうち、現在訳されているものは、「くまのパディントン」のほか、「パディントンのクリスマスマス」「パディントンの一周年記念」「パディントンフランスへ」です。